

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月14日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520720

研究課題名（和文）第一次世界大戦とインドネシア地域社会

研究課題名（英文） The First World War and the Indonesian Local Society

研究代表者

植村 泰夫（UEMURA YASUO）

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40127056

研究成果の概要（和文）：

1910年代前半インドネシアの交易を担った主力はオランダ、蘭印、英国船籍の大型蒸気船だったが、大戦勃発によって船腹不足が深刻化し、17～18年がピークだった。これにより蘭印の対ヨーロッパ貿易は激減したが、対アジア、対米貿易の拡大がこれを埋めた。これとともに、この時期には日本船の蘭印航行が急増した。船舶の出入港にはきわめて大きな地域差があり、大規模港で船腹不足が深刻なのに対して、マレー半島に近接する諸港ではそれは見られなかった。

研究成果の概要（英文）：

It was mainly the big steamers belonging to the Netherlands, Netherlands India and the Great Britain that carried the trade of Indonesia in the first half of the 1910s, but the serious shortage of bottoms occurred by the outbreak of the First World War and peaked in 1917 and 1918. This much reduced the trade of Indonesia with European countries, which was however made up by the increasing trade with Asian countries and the United States of America. Simultaneously Japanese ships began to come there much more frequently. There were much regional differences in the arriving and leaving of steamers, namely, the large ports experienced serious shortage of bottoms but the ports near the Malay Peninsular not.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：東南アジア史

1. 研究開始当初の背景

第一次世界大戦はインドネシア植民地経済に大きな打撃を与えたことは以前から指摘されてきたが、その具体的な様相について

は十分な研究がなかった。研究代表者は夙に第一次世界大戦とその前後の時期の経済史的な重要性に着目し、当該時期の糖業と農民経済の関わり、1910年代末の食料問題深刻

化と米流通のあり方などについて研究を進めてきた。また近年では植民地後期インドネシアの地域社会のあり方を検討してきた。本研究は研究代表者のそうした研究の延長線上にあり、第一次世界大戦期のインドネシアをより多面的に検討することによって、研究のさらなる深化を目指した。

2. 研究の目的

第一次世界大戦開戦前の 1910 年代初めから終戦後の 1920 年代初めを対象時期として、インドネシアの貿易構造の変化、内地流通規制政策の推移、経済変動の地域社会における影響のあり方、イスラム同盟の活動などを検討することを目的とした。

3. 研究の方法

当該時期のインドネシアをめぐる貿易構造の変化の特徴、輸入代替工業化の進展度、農村工業の発展、輸入規制の仕組み、イスラム同盟の運動、スラバヤ糖業の栽培縮小と食糧増産、植民地政庁の食糧増産政策と商業作物栽培規制、食糧危機とバンテンにおける米流通のあり方、ランボン地域の社会変化などの個別的テーマを、一次史料に依拠して実証的に検討することを課題とした。このため、オランダおよびインドネシアの文書館、図書館などで、未刊行植民地文書を中心とした同時代史料を収集することを、重点的課題とした。

4. 研究成果

本研究の成果は、A、インドネシア地域社会の構造の解明、B、1910~20 年代のインドネシア貿易構造の変化の解明、C、第一次世界大戦期インドネシアの船舶就航状況の特徴の分析、の 3 つに大別できる。

まず A については、まずジャワ村落(デサ)を地方自治の観点から検討し、オランダ植民地権力は「原住民自治体条令」(1906 年)によってデサを近代的な自治体に変質させようとしたが、必ずしも成功しなかったことを解明した。次に、中ジャワ内陸部と北海岸を結ぶ物流の内容と担い手について検討し、1920 年代初め頃から鉄道のライバルとしてトラック輸送が登場し、競争は 30 年代初めには激化し運賃値下げが繰り返されたが、最終的には資本力ある鉄道に有利に展開したことを明らかにした。ただ、現在ではこの区間は鉄道がなくなっており、トラックが唯一の輸送手段になっている。この逆転がいつ生じたかは、今後の検討課題である。

B に関しては 1910~20 年代インドネシアの貿易統計の分析を進めた。この結果、インドネシア全体としては、輸出額は 1916 年まで上昇、17~18 年は減るが大戦前を上回っており、19~20 年には激増し、21~22 年は大きく

減るものの 10 年代よりは多く、23 年以降はかなり高い水準を維持する、輸入額では 14 年の大戦勃発後、16 年まで減少し、17 年から増加を開始し、20~21 年にピークとなるが、輸出入とも地域別に見るとこれとは傾向がかなり違うことが明らかになった。また、輸出品は大戦末期に大幅に輸出が減る煙草、コーヒー、コブラと、あまり減らない砂糖、ゴム、石油関連品、コショウ、錫に大別できるが、この差の規定要因解明は課題として残されている。輸入品についても同様の検討を行ったが、輸出品より複雑な動きを示す。例えば米は特定時期に特定地域の輸入が大きく増減するが、繊維製品の場合は各地域ともほぼ同じ傾向を示す。機械や鉄の輸入では、20 年代後半期から外領比率が急拡大して、30 年台にはジャワを凌ぐという特徴がある。背景にある産業構造変化の検討は、今後の課題である。また、貿易の地域的差異についてどのように考えるかは、次に述べる C の成果とも関連させて、さらに詳細な検討が必要である。

C については、特に集中的に取り組んできたが、それは 2009 年夏のオランダにおける史料調査の中で、計 254 港に及ぶ詳細な船舶就航統計を入手することができたからである。このデータを中心にした検討から、以下の点が明らかになった。(1) 当該時期のインドネシアの交易を担った主力はオランダ、蘭領インド、英国船籍の容量が 300m³ 超の蒸気船である、(2) 大戦勃発とともに外国航路では上記の船種を中心に船腹不足が発生して 17~18 年に最も激しかった。内海航路では 16 年頃から始まり 17~18 年が激しかったが外国航路ほどではなかった。(3) 船腹不足の最大の要因は、英米による船舶の接收だった。(4) この結果、ヨーロッパと蘭領インドの間の貿易が激減するが、それは対アジア、対米貿易の増加で埋め合わされた。(5) 船舶の出入港状況には極めて大きな地域差があり、大規模輸出港で船腹不足が深刻であるのに対して、マレー半島に近接する港ではそれは見られない。このことは、シンガポールなど近隣諸港との交易がこの時期に発展したことを示唆している。これらの成果は、今後、インドネシアの貿易構造を地域差を踏まえて再検討し、第一次世界大戦の地域社会に対する影響をいくつかの類型に分けて論述するための基礎になるものである。

C については、以上に加えて、この時期に来航が急増した日本船の動きに着目して、その特徴を検討した結果、以下の点が明らかにされた。(1) 日本船来航の始まりは 1890 年であるが、当初は不定期船で日本を出航後、香港、海峡植民地、マニラなどで貨物を積み込み、それを蘭印へ運び、蘭印で砂糖などの物産を積んで帰国したと推定されること、(2)

これは当時の日本には蘭印に供給できる工業製品がまだ十分にはなかったことの反映と考えられること、(3)1910年代に蘭印諸港を出航する比較的大型の日本蒸気船が激増したが、第一次大戦はそれをいっそう進める契機となったこと、(4)第一次大戦期は、南洋郵船と大阪商船を中心とした大船舶会社の自社船就航への移行期だったが、それ以外の船舶会社による不定期航路も相変わらず盛んだったこと、(5)日本船の寄港先はとりわけバタヴィア、スラバヤ、スマランの三大港を中心にジャワの諸港が多く、外領への寄港は少ないこと、(6)大戦期に初めて日本船が来るようになった港が非常に多いこと、これらは18~19年に外国航路を中心に巨船が寄港した Belawan, Padang, Tarakan と、寄港船舶隻数、容量がきわめて少ないそれ以外の港に分類できること、などである。

なお、研究分担者の藤田英里は一貫してスマトラ南部ランブン地方の問題を検討しており、第一次世界大戦期を跨ぐ時期において、この地方では西ジャワ・バンテン地方からの出稼ぎ労働者が、主として中ジャワからくるジャワ人移民とともに、生産活動と経済の担い手としてきわめて重要な役割を果たしていたことを明らかにした。

以上に掲げたように、研究内容は当初計画からはややずれたものとなり、結果的にはこの時期の地域社会変化の外在的条件の分析に重点が置かれることになった。しかし、その研究成果は、いずれもこれまで十分には論じられてこなかった問題を明らかにしたものである。

とりわけCに関しては、3年にわたる史料調査にもかかわらず、船舶就航統計以外には適切な史料が十分には入手できなかったもので、必ずしも問題を詰め切れていない恨みはあるが、これまで全く指摘のなかった論点を明らかにすることができたと考えている。今後、この間に収集できた、オランダ商事会社(NHM)文書、王立郵船会社(KPM)文書などを詳細に検討することによって、船舶就航の変化と貿易変化との構造的な連関を明らかにすることが可能になった。これを踏まえて、初めてインドネシア地域社会の変化の世界史的意味を論じることが可能になると考えている。

さらに、この船舶統計に現れる「300m³ 未満の現地式艀装帆船」に着目することによって、これまで明らかではなかった、いわゆるプラウの航行実態を解明できる展望が開けた。このことは、これまで不明であったジャワと東部インドネシアの間の流通を検討するための大きな材料になり、それによって植民地後期インドネシアが経済的にどの程度統合されていたのかという、インドネシア国民国家成立の条件の有無を探ることにつな

がるものである。この点については、引き続き考察したい。

また、本研究の成果は、日本・インドネシア関係史研究についても地域差という視点が重要であることを具体的に示した点で意味があると思われる。第一次大戦期からプレゼンスを急速に増した日本と日本人がどこで何をしたかを地域ごとに細かく明らかにするという課題が浮かび上がった。これらは今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- 1, 植村泰夫, 第一次世界大戦期インドネシアの船腹不足問題研究序説、史学研究、第272号、査読あり、2011年、pp.1-29
- 2, 植村泰夫, 植民地期ジャワの村落と地方自治、社会経済史学、第75巻第2号、査読あり、2009年、pp.73-88
- 3, 植村泰夫, 蘭印鉄道会社とトラックの貨物輸送競争をめぐる、広島東洋史学報、第14号、査読なし、2009年、pp.61-88
- 4, 藤田英里, 初期ランブン移住政策とジャワ人-1905年から1920年代まで-、東南アジア歴史と文化、第38号、査読あり、2009年、pp.141-167

[学会発表] (計2件)

- 1, 植村泰夫, ジャワ土地問題研究から第一次世界大戦期インドネシア地域社会史研究へ、東南アジア学会中国四国地区例会、2012年3月17日、広島大学
- 2, 藤田英里, 世界恐慌とバンテン地域社会、東南アジア学会第215回中部例会、2009年6月27日、名古屋大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植村 泰夫 (UEMURA YASUO)
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40127056

(2) 研究分担者

藤田 英里 (FUJITA ERI)
広島市立大学・国際学部・研究員
研究者番号：70516012

(3) 連携研究者

()

研究者番号：